

臨床獣医師から見た

養鶏業界 68

(株)ピーピーキューシー研究所 加藤宏光

HPAIへの対応

七九年ぶりで発生したHPAIへの対応は、

①当該農場の全羽数殺処分と徹底的な消毒

②半径三〇km以内の鶏、生産品および養鶏関連資材（飼料、薬品を含む）の移動禁止

③半径三〇km以内の養鶏場に関するAIモニタリング実施

であり、すべての作業は行政担当員が実施しました。

殺処分は四五〇程度のゴミ用コンテナに厚手のポリ袋をセットし、この中に鶏を入れて炭酸ガスを注入するのですが、不慣れな様子がテレビなどの情報でも手にとるように感じられました。

また、殺処分した鶏を焼却するにも、あまりに鳥インフルエンザウイルスが恐ろしいモノであるかのような喧伝が行き届いているため、住民側が容易に納得しないといった障害が発生しました。

そうはいっても、総羽数が二万五〇〇〇羽程度であったために、多少手間どったとはいえ、大きな問題は感じられませんでした。

次いで、熊本県で数羽の趣味の鶏でHPAI発生が確認されたものの、産業的なレベルでなかったことから、明確な拡散ルートが追えない不安感をおおる程度で、社会問題としての展開には至りませんでした。

京都府下での発生

京都府下（園部市）の約二五万羽という、規模としては中程度の採卵農場における発生が確認されたのは、それから一カ月ほどした頃です。

この農場は兵庫県の大型採卵養鶏場に属する開放鶏舎構造のものでした。

当初、オーナーがHPAIであることを察知しながらも、自分で死んだ鶏を解剖した上で、「クロストリジウム菌感染による出血性腸炎だ」と診断し、家畜保健所への届け出をしなかったことがマスコミによって取

り上げられました。

事件への展開

ところが、さまざまな調査の結果、死亡数が日を追って幾何級数的に増える初発ロットを、社長の指示によって急遽アウトし始めていた事実が明らかにされ、またその群の一部が肉として処理され、関東方面などへ配送されていた事実や、この処理場へ問題のロットと同日に他の経営体からの廃鶏が出荷され、極めて短期とはいえ同居状態となっていたことが分かりました。

このために、これらに関連した会社のすべてに対する追跡調査が実施されるといった大きな波紋を来しました。

マスコミへの強硬な対応に対する反感もあって、報道側から、当該農場の経営者に対して厳しく社会責任を問う姿勢が明らかになりました。このマスコミの攻勢に社会責任を一身に背負った経営者は、ご夫人と共に自分の命を絶つことによって責任

《コラム》

【取材のモラル】

発生近隣のブロイラー農場へは、新聞やテレビなどの取材班が訪れたようです。内情に詳しい方面の情報によれば、ある取材班のカメラマンが発生農場へカメラ取材に入った後、翌日早朝に無断で鶏舎内に汚染（されているであろう）靴のままで入り込み、鶏の撮影を行ったと聞きました。

その後、行政からもモラルをもった取材姿勢の要請がアナウンスされるようになりました。

昨年来の野鳥におけるHPA I感染事例が報告され、また種鶏やブロイラーを含むかなりの発生件数が数えられましたが、そのうち農場勤務者の靴を介した発生を類推させるものが伝聞されています。

環境汚染から生産現場へのウイルス持ち込みに、人間が大きな役割を果たしている可能性を重大に評価して防疫に当たる必要性を実感させられます。



▲自衛隊員による処分の例（大槻教授より）



▲H5N1亜型HPA Iによる死亡例（京都産業大学・大槻公一教授より）

を果たそうとされました。この問題は悲劇として世界中の知るところとなり「鳥インフルエンザ」の恐怖感を決定づけることになったのです。

行き過ぎたマスコミ

一方のマスコミサイドにも行き過ぎた感があつたようです。

京都の事例は当初二五万羽採卵農場に単発したのですが、初めて発生した事態へのマスコミの過熱ぶりは激しく、報道陣が「農場内へ無断で侵入するだけでなく、発生農場へ入った靴のままで続いて近隣のブロイラー農場へ取材に入る」という理不尽な行動も平気で行われていたという事です。



▲埋却作業（大槻教授より）

その実態はテレビや新聞などでも明らかにされ、汚染農場への侵入が、産業にとつても公衆衛生上でもいかに危険な行為かは認識されるようになりました。

こうしたことによつて、発生農場での報道陣の直接的な行動そのものは控えめになったものと思われまふ。しかし、当事者にとつての大事を興味本意に取り上げるかのような姿勢は他にもさまざま見られます（コラム参照）。

カラスからのHPA Iウイルス分離

京都府綾部市で発生したHPA I症例に際して、農場近くで弱って捕獲された複数のカラスからHPA Iウイルスが分離されたことから、カラスへの病原性が問題となりました。感染したウイルスの致死性のためにカラスが弱っていたと考えられたからです。

この時期で最も遅くウイルス感染が確認されたカラスの事例は、京都の農場から三〇km以上離れた、大阪

《コラム》

【鳥インフルエンザに感染したカラスについて】

カラスは昔から養鶏業（特に採卵農場）にとっては厄介な問題でした。開放鶏舎が主流であった当時には、鶏舎にカラスが侵入するのを防ぐことはなかなか困難な課題でした。

カラスが鶏病を持ち込むことへの恐怖感はさほどではありませんでしたが、カラスは面白半分に卵受けから卵を盗む習性があります。ガラクタを巣に溜め込むカラスの習性は有名で、ゴルフボールや色のついたビニール管などさまざまなものをくわえ込むそうです（カラスの習性に関しては動物作家・戸川幸夫氏の小説などで詳しく述べられています。著者は小学校当時から愛読していたものでした）。

カラスは毎日数個から十数個の卵を加え、どこかに蓄えます。

当時、ある人は農場裏の土手の陰に200個以上の卵がカラスによって隠されているのを確認したそうです。当時から多くのカラス害に対して、さまざまな対策が講じられてきました。

その1つが、毎日のように出る死亡鶏を使った毒餌トラップです。強力な農薬や殺鼠材を腹を開いた死亡鶏の内部にふりかけ、または塗り込んで、鶏ふん乾燥場などに置くのです。死亡した鶏の肉や内臓はカラスの大好物です。

少し話は逸れますが、著者がカラスの持つ特別なセンスに驚いたことがあります。20年近く前のことです。ある農場を巡回していました。その農場では巡回に合わせて、当日死亡が確認された鶏を鶏舎ごとにサービスルームに出してあり、それらを著者が全部解剖して死因を確認することにしていました。また巡回にはサルモネラモニタリングのために、鶏舎の床や卵の搬送ベルトなどの拭き取りサンプル、さらにはエサ桶の飼料を1kgほど採取します。鶏舎数が14棟もありますから、これらの材料を45ℓのポリ袋に入れると、結構なポリariumになります。

ある鶏舎で解剖したとき、肝臓に軽度の肝炎状所見を確認しました。このような場合には、詳細な病原・病理検査のために材料を採取し、小さなポリ袋に収めてその他のサンプルと同梱して棟から棟へ移動します。この生サンプルは100gほどにもなるのでしょうか……。すべてのサンプルを入れた大きなポリ袋を10分ほど鶏舎外に置いて、鶏ふんの引きずりサンプルを採取して、再び屋外に出たときに先のポリ袋に直径3cmほどの穴が開いていました。

小さな穴ですから、最初はどのようにして開いたものか分かりませんでしたが、今、採取した鶏ふんの引きずりサンプルを大きなポリ袋へ入れる際にふと気がつきました。

肝臓の生サンプルだけがないのです。

そうです、農場にうろついていたカラスが、ほんの10分の間にさまざまなサンプルが突っ込んであるポリ袋に穴を開け、肝臓生サンプルだけを盗んでいったのです。何重にも包まれている、それもいくつもあるエサや拭き取り、あるいは採血したシリンジなどのサンプル群から生サンプルだけをピックアップする能力に、腹が立つより、改めて感心させられました。

さて、毒餌を食べたカラスはその場ですぐに死ぬわけではありません。2～3日の経過で徐々に衰弱するケースが多いようです。著者には、吹田市などで見つかった瀕死のカラスはH5N1ウイルスの病原性より、毒餌を食べて弱ったという条件を加味して理解すべきと思われるかもしれません。

府吹田市という地域で瀕死になっていたものでした。いずれのカラスも瀕死状態であったことが、ウイルスのウイルス病原性獲得を思わせ、あたかもウイルスの凶暴性をイメージさせた報道が続きました。

その後動物衛生研究所などで、

各鳥類に対するHPA Iウイルスの病原性が確認されているでしょうが、著者は鳥の死亡原因をウイルスの致死性に帰することに對して、多少の疑義をもっています。その理由は

コラムで述べています。実際のウイルスがカラスにどの程

度の病原性を有するモノかは、確認していません。今回大阪府立大学で開催される一五二回獣医学会において、スズメに對するH5N1亜型鳥インフルエンザウイルスの病原性に對する検証データが紹介されます。

カラスに對してはどうなっていた

のことも含めて、調査して紹介したいと思います。

業界各分野への影響

コラムで述べているように、京都

《コラム》

【報道陣の姿勢】

京都の事例に関連して、ある生産者が内幕を教えてくださいました。

この農場では、廃鶏の出荷先が姫路の業者で、運悪く京都のHPAⅠ発生農場から症状を出している鶏群が出荷された折にこの農場からも廃鶏群が出荷先でAⅠ群と同居してしまったために、行政からのトレースバック調査を受けたのでした。

さらに悪いことに、家畜保健衛生所で実施したゲル沈試験（AGPテスト）で擬陽性の個体が見つかりました。当時AGPテストではこうした擬陽性のモノがしばしば検出され物議を醸していました。

この直後から、農場や事務所上空をヘリコプターがブンブンと飛び回りはじめ、さらに高台からテレビカメラが農場へ向けて放列を敷いているのが手にとるように分かったといえます。つまり、擬陽性の判定で再検査が実施され、真性の陽性であれば即座にスクープしようと、NHKをはじめとする各テレビ局が虎視眈々と狙いを定めていたわけです。

思い当たることのないこの会社の経営陣は、「こうした仮借のない報道陣の包囲網に心底疲れた。まるで自分が罪人であるかのような扱われ方は理不尽そのものである」と、静かながら怒りを込めた話を聞かせてくださいました。

報道により情報を得た消費者が風評被害をもたらします。もっとも消費者の心理を深読みした市場の反応の方が影響が大きいのですが……。この問題については改めて取り上げたいと思います。

の事例で廃鶏出荷された廃鶏業者も渦中に投げ込まれました。同じ廃鶏処理場へ出荷していた生産者が、振り回された様子を語ってくださいました。また、肉としての商品が流通した先でも同様の騒ぎが起きました。HPAⅠへの処理が不慣れであったことも含め、試行錯誤の行程でさまざまな問題が提起されました。そ

の中には、廃鶏処理場で殺処分した鶏や肉を焼却処分するに際して、一般ごみ焼却場でなかなか許可が出せない、あるいはその焼却場へ運搬する際、道筋の住民が運搬に同意しないといった考えられない問題が発生したと聞いています。

